

て会がつくるので市は県と相談して早目に適地を決め、適宜予算化して実現してほしい。

④—むすび

私は祖国と平和を愛し日本人が好きだ。だからこそよかれかしと願望し敢え

て苦言を呈する。人生の凡そ半分を外国で暮らし、主に教育と労働行政の経験から私の感じた日本人最大の欠点は国際性の不足だ。工業生産力には強いが食糧資源、防衛等いづれも弱い日本、もし世界に愛される日本になれば二一世紀での命運は明らかであろう。『戦艦』牛

場信彦氏のような日本人が一〇人もいたら、日本の国際的地位は遙かに高くなる」と、昨年来日した米国人有識者たちが再三言ったと新聞は報じた。松下幸之助氏の政経塾、中内功氏の流通大学、中山素平氏の国際教育大学、いづれも的は国際人の徹底的養成訓練であろう。

私財もいわゆる顔もない私は、アイデアと情熱と実行力でミナトヨコハマを世界の横浜、魅力ある横浜にするひとかけらになりたいのである。国際学生の村は横浜の異名となるであろう。

△国際交流を考える市民の会長

②「横浜国際交流ボランティアの会YKV」の活動

小山八千代

一——グループの性格と誕生まで

横浜国際交流ボランティアの会（略称YKV）は、良き民際外交の担い手を目指して結成された。入会の動機はまちまちであるが、誰もが平和な世界の実現を願ひ、そのためには各国の人々が互いに相手の文化を尊重しながら共存していかなければならないと考えている。また歴史的にも外国人との接触の多かった横浜という土地に生活する者として、共にこ

の複雑な世界情勢の中で日本が生きる手だてを学び、一民間人としてそのため役立つ道を求め行動していきたいと願っている。

五九人の会員は、特別会員二人を除いて、全員が昭和五十一年度から横浜市教育委員会が開講している婦人ボランティア育成講座Aコース（国際交流のためのボランティア育成コース）の受講生である。五十一年度、五十二年度、五十三年度の各期受講生をそれぞれ一期生、二期

生、三期生と呼び、受講後それぞれにグループ活動を希望する者が集まって各期の会を結成した。そして市教委の職員からの働きかけもあって一期の会（Yotohama Hens Society）、二期の会、三期の会が、五十四年四月に連合して、横浜国際交流ボランティアの会を結成した。対外的な窓口を一本化するとともに、各会がそれぞれの特色を保持しながら活動していく道を選ぼうという考え方から、少くとも初めの一年間は連合会の形をとる

- 一——グループの性格と誕生まで
- 二——一年歩いてきて思うこと
- 三——夢
- 四——最後に

こととなった。これは将来、自然な形で各期の仕切りが取り外されればそれでよし、そのまま連合会として続くのもよしという、融通性に富む選択であった。

実際の運営方法は次のように決めた。

- ①「企画委員会」「個人ファイル作成委員会」「活動の場を広げるための委員会」の三つの小委員会によって、会の運営が支えられる。
- ②各期の合同連絡会を月一回持つ。
- ③会計は各期ごとに処理し連合会経費は三等分する。
- ④各会が個々

横浜国際交流ボランティアの会（YKV）1年のあゆみ
(54年5月～55年2月中旬)

合同連絡会 毎月1回（9～22）。▷9月：フランス大使館員夫人からインドシナ難民救済について聞く。▷11月：フレンドシップアジアホームの人からインドシナ難民の現状を聞き、カンパを集める。

バザー 12月1日開催。▷手芸講習会 7/11, 9/26（合同連絡会終了後）、10/26（同）。▷打合せ等準備 9/11, 10/23, 11/30。▷純益28万円。ユニセフを通じてタイ国境のカンボジア難民の子供たちに20万円、県国際交流協会へ児童図書購入費として5万円、カリタス冥想の家のベトナム難民の子供たちに学用品購入費として3万円を贈った。

川崎民家園見学会 5/20（20）。

日本語教授法の学習会（20）2月から開始。会発足後は5～7月、月2回。講師は東京日本語センター所長。▷同センターの校外学習、6/28横浜見学（13）、10/31・11/1 箱根泊。

米国国務省日本語研修所主催ストーリーテリングの会に参加 7/26（8）、10/4（6）、11/8（10）。同研修所のパーティに出席 6/26（10）。

日本語センターの日本語教授法見学 2/13から3週間（16）。

米国国務省日本語研修所の中級日本語会話研修補助 2/14から当分の間（10）。

他の会議等へ出席 ▷5/15～18 全国婦人ボランティア活動学習計画講座（1）▷7/12横浜市ボランティア育成講座4期生に活動状況を説明（3）▷8/15・28 神奈川県青年団体連絡協議会主催第4回国際交流の集い実行委員会（2）9/21～24 同国際交流の集い（延べ6）、10/10 反省会（2）、12/9 集い参加の外国青年2人の帰国送別会（4）▷12/22 海外協力事業団横浜研修センターの1979年サヨナラパーティー（5）▷12/27 海外造船技術協力本部主催フレンドシップパーティー（10）

ホームステイ受け入れ ▷9/1～2 総理府主催54年度中南米諸国青年招待事業（8）▷12/28～1/6 海外造船技術協力本部の研修生と東京日本語センターの生徒たち（7）

その他 ▷6/9 東海大学の留学生施設見学。▷8/20 アルゼンチンから来日中の日本語教師石川宏紀氏から、同国における日本語教育の現状を聞く（10）。▷11/7 鎌倉のカリタス冥想の家でベトナム難民の子供たちに日本語を教えるために会員3人が始める。

新年会 2期の会・3期の会 1/25, 1期の会 1/28, 2/7 の合同連絡会で各期の会がYKVの今後の方向について話し合った結果を持ち寄る。

（ ）は参加会員数

にかかわりを持ってきた外部団体への窓口は一本化する。
四月の第一回合同連絡会では、企画委員会からの提案で、全会員参加の行事を春秋二回開催、春は外国人にも呼びかけ、日本文化の紹介と国際親善を目的として川崎民家園を見学、秋には国際児童年にもちなんだ、世界の恵まれない子供たちのためにバザーを行うことを決定。「活動の場を広げるための委員会」からは五月開所予定の鎌倉のベトナム難民定住センターへの働きかけが提案された。日本語指導や生活適応訓練に人手を必要

とするのではないかというのがその理由であった。「日本人の夫を持つ妻の会」とも交流したいという希望も述べられた。そのほか、市内在住の孤独で高齢の外国人の力になることはできないかとか、三崎の神奈川国際水産研修センターとの交流など、いくつかの案があげられた。いま一年を振り返れば、実現したのもあり、しなかったものもあり、また思いがけず機会を与えられひらけていた活動もあった。この一年の活動を別表に記した。

二——「年あるいてきて思うこと」
①メンバーの一員であることを自覚しよう
会員はそれぞれの講座受講年度によって、当然のことながらこの活動にかかわってきた年数がちがう。四年近くたつ一期生の中には、初めに志した頃と情勢が変わり、活動が停滞して悩む者もいる。しかし大半が家庭の主婦である会員にとって、家庭の諸問題のために活動の機会が少なくなってもやむをえないことと思う。メンバーの中でその時々能力や力

を提供できる者が活動を支えていけばよいのではないか。川崎民家園見学の際、通訳として活躍した会員、バザー準備の手芸講習会の講師として協力した会員など、プロとしての能力を役立てて会の活動を支えた働きは大きい。
しかし私たちは、自らの自由意思でこの会に入会したボランティアであること忘れてはならないと思う。月一回の活動参加は、会員としての最少限度の責任である。一度参加することによって、自分が作っていくことの難しさとそれを乗り越えていく楽しさもわかり、次第に参

加意識が高まっていくのではないだろう
か。

②—多面的な要求に答える運営方法を 考える

国際交流のためのボランティア活動は、大きく分けると国際親善的なものと奉仕的な性格のものがあって、それが活動を幅広くも散漫なものにもしやすい。またメンバーの意識も、どちらに重点をおくかによって、それぞれに異なっている。そこで、さまざまな会員の意識と外部からの多様な要求に答えるための良い運営方法を見つけていかなければならない。

現在YKVは各期の個性を重んずるあまり、連合会としての組織作りが十分でなく、行き当りばったり的な運営で間に合せている。外部からの情報を受信するアンテナとしての代表と、連合会としての会計と運営委員とから成る事務局とが必要ではないだろうか。またYKVは成文化された規約をもたない。発足時、とにかく一年間やってみてから考えようとしたのであった。しかし活動を思の長いものにするためにも最低の約束事は必要である。今後とも引き続きこの講座が市で企画されとも限らないし、講座を受講しなくても参加を希望している人もあろう。新会員確保のためにも会員の

資格ぐらいいは規約として成文化しておく
たい。

外部からの要求に応ずる会員の受け入れ能力の把握も必要である。せっかく作成した会員の個人別データカードが死蔵されている。カードが生かされるほど活動が活発でなかったからかもしれないが、もっと具体的な個人の活動参加能力が把握されていたなら、外部からの要求にも、より早く対応できたのではないかと思う。

③—当てになるボランティアを目指して

YKVの活動は、(一)国際親善的性格の強いもの、(二)奉仕的色彩の濃いもの、(三)会員相互の情報交換のためのもの、(四)学習のためのものなどに分けることができる。またそれらは、継続的に行われるものと単発的に行われるものとに分けられ、それぞれに、外部からの要求によるものと、会の企画によるものを持つている。国際交流のためのボランティア活動という幅広い活動を満足させる要素として、それらは不可欠のものであり、どの活動も充実させていきたいものばかりだが、まず今年は、継続的に参加できる活動の場を広げていくことに、力を入れていきたいと思う。いくつかの定期的な活動の中から会員それぞれが自分に合ったものを選び、参加することによって、

一人一人の参加意識は向上し、活動は次第に実を結んでいくに違いない。いず
れにせよ、YKVの現状は混沌沌としてい
て、活動の中から問題点を取り上げてう
んぬんするところまで至っていない。

しかし、在日ベトナム難民への奉仕や、ホームビジットなどの実際活動を通して、各国の文化の違いを知り、時には戸惑いながらも、心の触れ合う喜びを味わいながら、良きボランティアとして着実な歩みを続けている何人かの会員の中から、ようやく地に着いた、活動に対する問いかけが出てくるようになった。本当に必要とされる活動とはどんなものなのか、何を学び、どのように助け合っていたらよいのか等々。私たちはその答を探しながら、一步一步当てになるボランティアへの道を歩いて行きたい。

三——夢

④—地域に根ざした活動

多くの会員がまず身近な所から活動の輪を広げて行きたいと思っている。外国の人々にとっても住み良い横浜にするために、安心して彼等が地域社会に溶け込むことができる街づくりのために、私たちが貢献できることは何なのだろうか、どんな所でボランティアの手を必要としているのだろうか。一人住いの老人

が話し相手を欲しがっているかもしれない。慣れない土地で言葉のハンディキャップもあり、病気をもちながらも良い医者を探し出すことができない人々もいるだろう。若い留学生がホームシックにかかっているかもしれない。母国語で訴えることのできる弁護士を探している人があるかもしれない。どこへ行ったら自分の欲しいものが買えるかの情報が手に入るのを望んでいる主婦たちもいるだろう。これらの声を集める手だてを今私たちはほとんど持っていない。さまざまな要求をどうやって集め、それに対処することができようか。私たちの当面の夢はそのための手段を手に入れることにある。まず窓口としての一本の専用電話が欲しい。できれば事務局を置く場所を欲しい。そして各区役所や外国人登録所、留学生のいる学校や施設などにYKVの案内書を置き、誰もが気楽にSOSを打つことのできる窓口を知ることができるようになりたい。情報を受けた事務局はコントロールタワーとしての機能を十分に果たすことができるように成長しよう。

生活に密着した情報を提供する案内書(これには外国語を話す医師や弁護士を紹介、交通情報、旅行をする際に必要な宿泊施設の予約の取り方などを記す)や買物情報や各種行事など身近な事柄を集めた新聞の発行などは資金の点が問題に

なるが、横浜市とボランティアの協力で実現させることもできるのではないだろうか。また姉妹都市との交流も、さまざまな積極的なかわり方があるように思う。日本文化の紹介も古いものばかりでなく、現在の日本を知ってもらうための企画も持ちたいと思う。

②—広い世界にも目を向けよう

地域社会に根ざした活動を続ける一方、いつも広く世界に目を向けていたい。世界の動きに常に関心を持ち、さま

ざまな文化に触れ、違いの違いとして受け入れられるよう学ぶ機会を作っていく。学びの場は、日常生活の中で各々が積極的に作っていくことはいくらでもないが、外部の催しにも心がけて参加する一方、YKV独自の学習の場も持ちたい。そして、今後も、昨年行ったタイ国境のカンボジア難民の子どもたちへの救済のように、世界の中で最も必要とされる所へ機敏に反応して行きたい。また善意だけでも提供できる何かを持たなければ、結局は善意だけが宙に浮いてし

まうことに気付いて、日本語教授法を学び、それが在日ベトナム難民の子どもたちへの日本語指導へと結びついていったように、これからもまた、力となるものを積み重ねる努力もしていきたい。

四——最後に

私たちは今、同じような志を持った他のグループと横の連絡を持ちたいと思っている。本当に必要なところへ、より効果的に力が投入されるためにはどうして

も広いつながりが必要なのではないだろうか。例えば、外国人に日本を知ってもらうひとつの有効な手段として、ホームビジット、ホームステイがあげられるが、確かな受入れ組織を作るためにも、私たちは広く他のグループと手をつないでいかなければならない。そしていつの日かそのつながりが全国に広がり、日本中が網の目のように機能する日を見たいと願っている。

〈横浜国際交流ボランティアの会会員〉